

第 82 回政策研究大学院大学経営協議会議事要旨

- 日 時 : 2020 年 10 月 29 日 (木) 15 : 30～16 : 49
- 場 所 : オンライン
- 出席者 :
 - 〔学外委員〕
石田委員、今井委員、嶋津委員、名取委員、長谷川委員、林(康)委員、板東委員、薮中委員
 - 〔学内委員〕
田中学長、増山理事・副学長、横道理事・副学長、小島理事、木島副学長、黒澤副学長、高梨副学長、道下副学長、岡本大学運営局長
 - 〔オブザーバー〕 田代監事、林(礼)監事
- 欠席者 :
 - 〔学外委員〕 奥委員、林(文)委員
 - 〔学内委員〕 なし

議事に先立ち、学長から、新たに就任した田代監事、岡本大学運営局長の紹介があった。

I. 審議事項

1. 2020 年度学内補正予算について

大学運営局長から、2020 年度学内補正予算について説明があり、これを了承した。

◆主な意見等は以下のとおり。(○：学外委員、△：本学)

- ：今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかった様々な事業があるのではない
か。その分は翌年度以降に執行が上乗せになるか。
- △：教育研究については、オンライン等を活用しながら実施できている。研究にかかる
実地調査や研修業務等では、一部実施できない事業もあったが、来年度はあらため
て関係機関と調整して実施していくことになる。
- △：新型コロナウイルス感染症の影響で財務状況の悪化も予想したが、それほど影響なく過ごせ
る見込み。

2. その他

特になし。

II. 報告事項

1. 目的積立金について

大学運営局長から、2019 年度決算剰余金の繰越申請について、全額を目的積立金と
して積み増しすることが認められた旨報告があった。

2. 2020 年度人事院勧告について

大学運営局長から、2020 年度人事院勧告がなされた旨の報告があり、まだ閣議決定
されていないため、閣議決定後、国家公務員に準じた改定を実施するかどうかについて、
改めてご審議いただくこととしたい、その場合審議日程の都合により書面による審議を
お願いしたい旨の説明があった。

3. 政策研究センター事業について

木島副学長から、政策研究センター事業（2020 年度政策研究センターリサーチ・プロジェクト採択状況及び国際学術雑誌掲載奨励制度・学術書籍出版奨励制度受賞者）について報告があった。

◆主な意見等は以下のとおり。（○：学外委員、△：本学）

- ：新型コロナウイルス感染症関連の研究について、大学として、特にこういう方向を強調したいという方向性はあるか。
- △：大学が教員に対しこういう研究をするようにとは示しておらず、大学としての方向性があるわけではない。ただ、新型コロナウイルス感染症に係る研究はぜひ進めてもらいたいため予算措置をすることとした。研究者の創意工夫で新しい取り組みをしていただきたい。委員からご提案があればうかがいたい。
- ：新型コロナウイルス感染症については、欧米と比べると、アジア（特に東アジア）は感染者数、死亡率ともに極端に差がある。こういった研究に取り組んでいるか。
- △：把握しているかぎりではまだ取り組んでいない。リサーチ・プロジェクトの中で関連のありそうなものはあるが、医学部ではないため限界はあるように思う。
- ：新型コロナウイルス感染症に関連して、世界の新たな秩序を議論する動きがあり、例えばシンガポールやニュージーランドは医薬品や医療機器には関税をかけないようにしようというイニシアチブをとっている。こういった新しい世界秩序、貿易秩序について何らかの研究をしようという動きはあるか。
- △：政策研究院にインド太平洋協力研究会があり、学長が座長になっている。この研究会で「ポスト・パンデミックのインド太平洋の国際秩序の安定と国際協力の推進に向けて」という政策提言をまとめ、包括的なインド太平洋協力に関する日本政府への提言を行った。提言はウェブサイトに掲載している。
- ：SDGs 特別枠のリサーチ・プロジェクト「SDGs 指標のデータ可視化によるデータベースの拡充」はどういったものか。
- △：ウェブサイト「世界と日本」において SDGs 地図帳を作り、SDG 関連指標を世界地図上に可視化し、世界の現状の概略が観察できるようにしてある。
- ：リサーチ・プロジェクト SDGs 特別枠の中でも COVID-19 を意識したような研究課題もあり、またすべてのリサーチ・プロジェクトについて SDGs との関連性が整理をされている。それぞれの募集枠のコンセプトは何か。
- △：SDGs 枠は、国際機関などのポリシーメーカーに研究成果を発表する、あるいは研究成果政策に反映してもらうことを大きな目的としており、応募の際に、どのようにポリシーメーカーに成果を発表するかという提案が必要になっている。

3. その他

特になし。

Ⅲ. 協議事項

1. 2020 年度秋季修了者及び入学者の状況について

学長から、2020 年度秋季修了者、入学者の概要及びこれまでの日本人修了生、外国人修了生の状況について報告があり、協議が行われた。

◆主な意見等は以下のとおり。（○：学外委員、△：本学）

- ：この状況で入学者数をここまで確保したことは大変な努力の成果である。ただし、博士課程における日本人学生数が非常に少ない。過去に留学生の博士論文を読んだ

が非常にレベルが高く感じ、こういった中に日本人の学生が少ないのは非常に残念である。

- ：リクルート活動の成果がこうして現れていることは大変心強い限りである。アフリカからの入学生数が顕著な改善を見せている。具体的にどのような活動をしたのか。アジアではインドネシアとフィリピンが継続して特に多いが、今後も継続してこの位の入学者が期待できるというか。
- △アフリカからの入学者数が増えている背景には、もともと Public Finance Program 関税コースにアフリカからの学生が多く、今年度はその傾向が特に強く出たこと、One-year Master's Program of Public Policy (MP1) などその他のプログラムでも少しアフリカの学生が増えたということがある。アジア比べてアフリカのほうが、奨学金がまだ届いていない部分もあり、本学の奨学金プログラムに応募があったのではないか。アフリカの学生は非常にリーダーシップがあり、いい人材が採れているという印象がある。
- △インドネシアからの入学者数が多いのは、Economics, Planning and Public Policy Program (EPP) というインドネシア人を対象としたプログラムがあるためである。EPP が今後どのくらい続くかという点には不確実性があるので、それによってはインドネシアが減っていくという可能性はある。
- ：修了生の活躍を示した資料は、その活躍ぶりがよくうかがえるインパクトのあるデータである。在学生への刺激や新規学生のリクルート材料となりうる。本学の修了生が各国で活躍しているという点は、ぜひ広報も尽力されるといいと思う。また、修了生ネットワークというのは、この新型コロナウイルス感染症の感染状況では難しいと思うが、今後活動を強化していく考えはあるか。
- △修了生ネットワークは、大変重要だと思っている。オンライン会議システムを活用したオンライン同窓会の開催、SDGs に関連する修了生の優れた取り組みを表彰する SDGs Award の創設及び第 1 回授賞式に取り組んできた。今後も継続の予定。

2. 本学における新型コロナウイルス感染症への対応について

学長から、本学における新型コロナウイルス感染症への対応について報告があり、協議が行われた。

◆主な意見等は以下のとおり。(○：学外委員、△：本学)

- ：講義について、オンライン、対面、ハイブリッドで実施すると、教員の負担が相当大きいように思う。学生の要望を受け入れながらも、教員の負担も考慮して講義を実施して欲しい。また、学生にとっても、時間割の都合でオンラインやハイブリッドにしても結局は登校しなくてはならないなど、負担があるように思う。教員と学生の負担をどうとらえているか。
- △：これまでとは異なる環境の中で、オンライン講義やハイブリッド講義を実施するなかでの負担は多々ある。一方で、学生アンケートには、一部通学時間がなくても済むようになったという声もあり、メリット・デメリットがあるように思う。学生アンケートでは、講義の内容や質に関する意見より、通信環境の問題や印刷の問題など物理的な負担があったという意見が多い。
- △：各教員が多様な工夫をして講義をしている。工夫してよかった点は集約して共有し、改善を続けていけるようにしている
- ：ハイブリッド講義というのは、実際に対面で講義をして、その様子をオンラインで流すという方法か。
- △そのとおり。対面講義をただ流すということだけではうまく学生を引き付けられず、資料投影方法等で工夫をしている。ハイブリッド講義用のマニュアルを共有する。

○：学生アンケートでは、オンラインやハイブリッド講義でも十分であるという意見もあるようだが、いかに早期に対面講義ができるのかということは学生の本心として希望があるように思う。できるだけ早期に対面講義が実施できるようにお願いしたい。

△今後の状況を見ながら、感染拡大予防をしながら、対面授業を実施できる工夫をしていくことが課題だと考えている。

3. その他

特になし。

以上